

ヒメヒカゲはつい最近日本絶滅危惧種Ⅱ類からⅠ類への選定替えとなった、このまま放置しておいたら絶滅してしまうおそれのあるチョウです。実際、少なくとも1982年に兵庫県砥峰高原の湿原まわりにみられたヒメヒカゲは、同様にこの高原に生息していたウスイロヒョウモンモドキというタテハチョウ科のなかまともども、今では絶滅してしまっています。秋の砥峰高原に広がるススキが原を観光の目玉とするために徹底した野焼きが繰り返し実施されたことが絶滅の原因だと考えられます。限られた自然環境のなかで生きているチョウたちにとって自然環境の急激な変化が致命的となった実例です。まさか絶滅してしまうとは考えもしなかったことで、まさに貴重な生息記録となった、私が1982年に採集して保管していたヒメヒカゲの標本を、ウスイロヒョウモンモドキの標本とあわせて三田市の「兵庫県立人と自然の博物館」に寄贈しました。

ゴルフ場開発や宅地造成など、日本全国で草原性自然環境が激変しており、砥峰高原のような状況があちこちで起きているのですが、幸いなことに加古川市には安定して発生を継続している地域がいくらか残っています。それでも2008年に加古川の里山・ギフチョウ・ネットと加古川市環境政策課とがタイアップし、有志ボランティアの方の協力も得て実施した精力的な生息域調査では、数年前には相当数の発生が認められたはずの場所でほとんど発生が確認できないなど、憂慮すべき状況が進展していることがあきらかになりました。

2008年12月には、私は残念ながら足をケガして参加できませんでしたが、ギフチョウ発生地区で行ったと同じような生息地の環境整備活動として、草原維持に悪影響となるヤマモモの木の枝うち作業などが実施され、2009年以降、その効果確認の再調査が計画されています。

ヒメヒカゲは幼虫で越冬してスゲ類の葉っぱを食べて育ち、5月下旬から7月上旬までチョウとして活動します。翅表は地味な黒褐色ですが、写真に示すように雌雄共に裏面がとてもきれいで、その



眼状模様の数や形態に変化がみられ、そうした変化を好む採集者の格好のターゲットとなってしまいます。加古川では岩山の斜面に展開する草原地帯に生息し、きわめてゆるやかな飛翔で遊ぶため、その気になれば簡単にネットで捕獲されてしまいます。

私たち保全をめざすメンバーは無節操な採集者に現在の危機的状況を理解してもらうために警告看板をたてたりしなくてはならないのが実になさげなく思います。

なお、♂が交尾をしかける際にこれを拒む♀は草陰にもぐりこんでしまう習性があると聞きますが、上記生息調査の過程で雌雄がからみあう場面を目撃しました。ビデオカメラで追っていると、草原の陰となる隙間に確かに♀がストーンと落ち込む様子がみえたあと、♂もその草影へと同じようにもぐりこんでいって見えなくなり、それ以上は追跡記録ができなく、もしかしたら草陰で交尾が成立したのかも知れません。写真では分かりづらいのですが、ビデオ映像ではからみの過程が比較的好く記録できています。



交尾を嫌がる♀が草むらにもぐりこむ